**[　頂（いただき）へ　]**

岡本北小学校「ことばの教室」だより　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　R６,７,１６

　　　　　　　**しゃぼんだま　　7月号**

**今年の連休,郊外の山に出かけました。登山道の入り口で新緑を見ながら**

**休んでいると，一組のご家族が山道を見上げながら話をしていました。その**

**登山道は下から見える範囲でも岩場が続き，手で木の根をつかみながら登ら**

**なくてはならない，険しいものでした。父親らしい人が「第２駐車場からな**

**ら楽に登れるらしいよ」と言って車に乗り立ち去りました。しばらくして，**

**別のご家族がやってきました。彼らはしっかりした靴を履き，軍手をして，**

**迷うことなく登り始めました。最初のご家族が山頂でお弁当を食べているころ，２番目のご家族はまだ山肌にしがみつき踏んばっていることでしょう，ケガをして苦しんでいるかも知れません。では,どちらの子が幸せなのでしょうか。どちらの子が輝くような人生を歩むのでしょうか。**

**子供が苦しい状況に陥りそうな時，親がその要因を排除するため奔走することがあります。その子は将来，同じような危機に直面した時，それを一人で解決する術を持ちません。子供の安全を守るのは親の役割です。でも子供に困難な状況を乗り越えていく力を付けさせるのは，それ以上に大切な使命なのだと思います。**

**私たちが教えなくてはならないことは「楽な道の見付け方」ではなく，「険しい道の歩き方」のはずです。**

**親と共に歩んだ，険しい山道の記憶は，子供たちを喜びに溢れる山頂（いただき）へと導くでしょう。**

　　　　　　　　【　体の緊張と構音　】

　構音に課題を抱える児童の,原因の一つは構音器官の筋緊張,または発声する際の体全体の筋緊張にあるとされています。

　解決のためには,体全体や体の一部に「力を入れる」「力を抜く」という調節ができるように訓練する必要があります。実際の指導場面でも,「舌の力をぬいて」といっても,舌先が細くなったり,舌の縁が固くなったりする児童が多くいます。本人は脱力しているつもりなのに,体が緊張状態にあるからです。

　正しい構音の獲得には,「体の緊張・弛緩」を調節することが基盤となります。背筋をしっかり伸ばした「気を付け」と脱力した「休め」の繰り返しの中で,力を抜くという状態を体に覚えさせる・・。舌もまた同様です。

その上で,穏やかで無理のない声で,各母音を大きな音量で発声する訓練が求められてきます。ここができて,初めて「自分の声が作られた」状態とされています。それから子音を獲得して,初めて構音が完成していきます。自分の体と言っても,なかなか言うことをきかない部分もあるものですね。

　　　　　 **夏季休業中のお願い**

ことばの教室も夏季休業中はお休みになります。子供によっては,この期間中に,獲得した構音技術を忘れてしまうことがあります。

ご家庭では「読んだり・話したりする時間」を毎日設定し,その時間中は,発音の間違いを優しく指摘してあげてください。この習慣を重ねるうちに,子供たちは次第に「自己モニター力」を身に付けていきます。子供が,「今の自分の発音はおかしかったかも？」という疑問をもったとしたら,大きな進歩です。その時は,思いっきりほめてあげてください。

子供にとって,常に間違いを指摘されることは,話すことへの苦手意識につながり,逆効果です。

　夏休み明け,また子供

たちの元気な姿を見る日

を楽しみにしています。

